
魅月町・騎行の風

徳山 ノガタ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

魅月町・騎行の風

【Nコード】

N3039D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

32歳・妻子持ちの初穂^{はつほ}辰真^{たつみ}はウダツのあがない雑誌記者。社会人として、家長として、日々奮闘するが……”町”自身が語る現代ドラマシリーズ・その3

プロローグ・よつこそ魅月町へ

ん？ おやおや……これはこれは。三度、みたひあるいは再び、人によつては始めてお目にかかる。魅月町だ。

私の名前は魅月町。そして、これからお話しする話の舞台も、当然魅月町。……初めてこの町を訪れた人には、なんのことだかさッパリわからないだろう。

とにかく、私は”町”そのもの……とでも言っておこう。あまり深く考えないでくれ。

私はこれまで、二つの物語を語ってきた。今回もまた、新しい物語を紹介しようと思う。当然ながら、以前の話を知らなくても問題はない。

前の二つはいずれも学生、（あるいは生徒）が主人公だったが、今回は違う。妻子持ちの社会人が主人公だ。

タイトルは……【きりゆのかぜ騎行の風】

さあ、ご覧あれ！

第1章・低気(前書き)

初穂 辰真 (はつほ たつま)

32歳・雑誌記者

何事にも一生懸命なのが災いし、すぐにテンパってしまう。酒・タバコは全くダメ。

第1章・低気

「あなた……あなた、遅刻するわよ」

「……ん、んゝむ……」

「今日は朝から会議じゃなかったの？」

妻がそういった途端、男はベッドから跳ね起きた。

「そうだった！ マズイ！」

「ほら、早く顔洗って、ご飯食べて」

男の名は初穂^{はつほ} 辰真32歳。

「まったく……カナはもう学校行ったわよ」

慌ててパジャマを着替える辰真の背中に、妻・恵が声をかける。

「もう？ 早いな」

「今日から飼育係の当番なんですって。昨日の夜言ってたじゃない」

「……」

正直に言っつて、辰真は全く覚えていなかった。昨日は手当での出ない残業に追われ、クタクタになって帰ってきたのだ。もっとも、昨日に限った話ではないが。

「最近、忙しいからなあ……」

残念なことに、忙しい〃仕事ができる、とは限らない。むしろ眞は要領が悪く、昨日の残業も自分のミスを修正するためのものだった。

「そろそろ、あなた」

「なに……?」

朝食のトーストをコーヒーで流し込みながら返事をする。

「来週のことなんだけど、どうする?」

(……来週……? な、なにかあったっけ?)

「ま、今年もあなたに任せるわよ? あなた、こついつの考えるの好きだから」

(……え、ええと……なんだっけ? なんだったっけ?)

「……あなた? 聞いてる?」

こついつ時に、決してやってはいけないことがある。それは……

「あ、ああ。そうだな。任せておけ」

………適当に應えてしまうこと、それも安請け合いしてしまうこと、である。

「それじゃあ、お願いね。あら、電話」

妻が電話に出ている間にどうにか朝食を平らげ、仕事カバンを抱えて玄関に向かう。

「いつてきまーす」

玄関のドアを閉めるとき、妻が小さく手を振っているのが見えた。

……で、結局思い出せたのだろうか？

「なんだっけ……わからない……」

結婚して13年目。娘の香奈は小学6年生だ。辰真と娘は特別に仲が悪いわけではないが、もう甘えてばかりもないお年頃である。多忙もあいまって、二人はここ最近あまり言葉を交わしていない。

辰真が勤めている会社は、週刊のローカル雑誌を扱っている。辰真の仕事は、記事になりそうな事柄を探して文章化すること。いわゆる雑誌記者である。

「おはようございます。初穂先輩」

「やあ、おはよう。犬飼くん」

あいさつをしたのは、去年入ってきたばかりの女子社員・犬飼である。

犬飼は26歳。明るく、ハキハキとした性格で、若手ながらもどこかアネゴ肌なところがある。6歳年上の辰真よりも遙かにしっかりとした頼れる人物である。

「髪、ちよつと崩れてますよ？ 寝坊しましたか？」

「ああ、なんとか間に合ってたよ」

よく気がつき、厭味なところがない。この会社では貴重な人材である。辰真と同じ記者だが、こちらは隣の区域の担当だ。

「おはようございます」

二人が担当の部署に入った途端……

「はーっーほーっー！」

いきなり怒鳴ったのは、上司の木場（こば）である。

「なんだこれは！ こんなのを記事にしてどうするんだ！」

バサツと雑誌を床に叩きつける。犬飼がそれを拾って、開かれていたページの見出しを口にする。

「……」『5匹の犬が一行に並んで海岸沿いの道路を走る』

「こんな『ふぐん、そうなの。で？』という反応しか返ってこないようなものを記事にするな！ もっといいネタを探せ！」

「は、はい……申し訳ありません……」

そもそも、辰真が担当しているこの魅月町は至って平和な町で、雑誌に書くような出来事など滅多に起こらない。そのことは上司の木場もわかってはいる。

「それでも、もう少しマトモなネタがあるだろう。次はキッチリやれよ!」

「ハイ……」

蚊の鳴くような声でそう言うのが、今の辰真には精一杯だった。

第2章・爽風（前書き）

犬飼 真奈美（いぬかい まなみ）

26歳・雑誌記者

仕事だけでなく、家事全般もそつなくこなせる。自宅には大量の自作又イグルミがある。

第2章・爽風

夕方、取材に出掛けていた辰真がオフィスに戻ると、犬飼が一人で残っていた。

「お疲れ様です。先輩」

「おつかれ。一人？」

辰真はパソコンに向かって記事の文書化をはじめ。犬飼も隣の席で同じ作業をしていた。

「今日も残業になりそうだなあ……」

ポツリと辰真がこぼすと、犬飼が顔を向ける。

「たまには早く帰ってあげたらどうですか？ カナちゃん、今6年生でしたっけ」

「ああ。もう来年は中学生だ。まったく子供は成長が早いよ」

「早いですねえ……あーあ、私もあつという間にオバサンになっちゃったな……」

「いやいや、君がオバサンだったら僕はもうおじいさんじゃないか」

「フフフ……そうですね」

犬飼と話をしていると、自然に笑みがこぼれて疲れが取れる。

「あ、そういえば……」

突然、思い出したように辰真がつぶやく。

「どうしました？」

「いや……ちょっとね。大したことじゃないよ」

「そう言われると余計気になりますよ。話してください」

犬飼は手を休めて辰真の方に体を向ける。こうなれば話すしかない。辰真は今朝の妻との会話のことを犬飼に話した。

……ちなみに、私は辰真の疑問の答えを知っている。去年も、その前の年も、私は「それ」を見ていたのだからな。が、今はまだ伏せておこう。

「ふーん……来週、ですか……」

「何のことだか、サッパリ思い出せなくてね」

「何かの記念日とかじゃないですか？ 女性って、そういうの気にしますから」

「そう思ったんだけど、結婚記念日も女房の誕生日も12月なんだよ。今はまだ6月だし……」

「うーん……初穂先輩が好きなこと、が関係してるんですよねえ……」

ボールペンをアゴに当て、天井を見上げながら真剣に考え込む。一度首を突っ込んだら他人事にできないタイプらしい。

その様子を見て、辰真は話を変える。

「ま、まあ、ウチに帰ったら女房に聞いてみるよ。最初からそうすればよかったんだ」

「そうですね」

「さっ、それじゃあ早いところ仕事を終わらせないと」

そう言ってパソコンに向き直る。犬飼もそれに倣^{なら}った。

解決につながるかどうかは別として、人に相談するということは割と気分が晴れることである。辰真は幾分軽くなった心でキーボードを叩くが、結局、仕事を終えることができたのは8時を過ぎてのことだった。

「ゴメンね、少し手伝ってもらっちゃって」

「いえいえ、どうせ私は独り身ですから。遅くなっても誰にも怒られませんよ。……ああ、早く誰かいい人見つけなくちゃな……」

「犬飼君なら大丈夫だよ」

「そうですね……」

小さく笑って、犬飼は辰真に手を振る。

「それじゃ、また明日」

「うん。またね」

ビルの前で犬飼と別れ、タクシーを捨てる。いつもは歩いて帰宅しているのだが、今日は少しでも早く帰ったほうがいいと判断したようだ。

辰真の家は近い。すぐに到着して玄関を開ける。

「ただいま……」

「お帰りなさい。遅かったわね」

すぐに妻が出迎える。

「カナは？」

「もうご飯食べて、自分の部屋に引っ込んでるわよ」

「そうか」

今日も、娘と顔を合わせることはできないようだ。

シャワーを浴び、温め直した夕食を食べながら、辰真は来週のことを尋ねようとする。

「なあ……」

「あなた、知ってる？」

「え、……なに？」

妻の方が一声早かった。

「カナったら、好きな男の子ができたみたいよ」

「ええっ!？」

思わず大声を出す。危うく茶碗を落とすところだった。

「同じクラスの子。神代君って言って、野球クラブで、頭がいいんですって」

「カナもそんな年頃か……早いなあ」

「遅いぐらいよ。今までずっとソフトボール一筋だったもの。ようやく女の子らしくなってきたわね」

「ああ、そうだ……な」

その夜、辰真の頭の中は娘のことで一杯だった。

(いずれ、その男の子を家に連れてきたりするのかな……二人だけで遊びに行ったり……相手がいい子だといいいけど……)

結局、来週のこととは聞きそびれてわからず仕舞いだった。

第2章・爽風（後書き）

辰真の娘・香奈は、実は【夢想の鳥】に登場した美晴の友達です。

第3章・寒、そして熱風（前書き）

初穂 香奈（はつほ かな）

11歳・小学6年

1年生の時からソフトボールに明け暮れる。が、運動神経は父譲りなのが残念。

第3章・寒、そして熱風

その日は、朝早くから太陽が照りつける暑い日だった。

「で……結局聞けないままもう5日……」

「ここまで来るともう聞きづらいですねえ……」

昼に時間が空いた辰真と犬飼は、会社の屋上で話をしている。

「とりあえず、次の祝日に何かをやることだけはわかったんだけど」

「次の祝日つてもうすぐじゃないですか。もしも何か準備する必要があることだったら……」

「アウトだね……ハア……」

辰真はすっかり落ち込んでしまっている。家族とロクにコミュニケーションがとれていない自分が、ひどく惨めに思えているようだ。

「そ、そうだ、先輩、もう夏ですね」

犬飼が明るい声で話題を変える。

「私、去年までは毎年友達と海にいったんですけど、今年はどうかな……ジャーナリストにヒマはないですね」

「さ、さあ……そこまで大忙しじゃないよ。この町では」

「先輩は、家族でどこかに行ったりするんですか？カナちゃんをプールに連れて行ったりとか……」

「プール、か。カナが3年生行ってないんだよのとき以来、一度も連れて行ってないな」

「じゃあ、今年はどうですか？」

「それが……」

辰真の頭の中に、苦い記憶が浮かんでくる。

香奈と最後に一緒に市民プールに行った日。辰真は子供の頃からカナツチで、その日も水着に着替えてはいたが、プールサイドで見守っているだけだった。

香奈はたまたま遊びに来ていた同じクラスの女子と一緒に遊んでいた。いや、正確に言うと、クラスメイトの女子とその父親の3人で遊んでいた。この父親というのが見るからに遅しい、『頼れる男』なのであった。そして、その男は辰真にこう言った。

「初穂さん、一緒に泳ぎませんか？」

無論、その男に悪気はない。プールに来ているのだから、親同士のコミュニケーションとしては当然だろう。

「いえ、僕はカナツチですから……」

と、辰真は言おうとしたが、娘とその友達の手前、少々カッコつけてみたくなった。

(別に25メートル泳げってわけじゃないんだ。ただ水に入って遊ぶだけなら……)

そう思ってプールに入った途端……

沈んだ。比喻でもなんでもなく、文字通り沈んだ。足をつったのだ。

「がっつばあつ、あ……がぶっ」

「お父さん!」

「初穂さん!」

その男がすばやく引き上げてくれたおかげで、辰真は助かった。しかし、娘の前であまりにも無様な姿を晒すことになってしまった。

それ以来、初穂家ではプールはタブーになっていた。

「あの人は……井原さん、だったっけな。確か」

独り言のようにブツブツとつぶやいていると、犬飼が声をかける。

「……先輩、せんぱい、聞いてます?」

「あつな、何?」

「どうしたんですか? 顔、真っ青ですよ」

「い、いやちよつと嫌な事思い出しちゃっただけだから」

「もうすぐ昼休み終わっちゃいますよ。今日は午後から取材があったんじゃないですか？」

「ああ。小学生の野球大会だったな。こんな小さなことでも記事にしなきゃやっていけないんだよなあ……ウチの会社は」

犬飼と別れ、一人で会場に向かう。試合の場所は、広い公園の中にあるグラウンドだ。

（そういえば、カナが好きだって言う男の子も野球クラブだったっけ）

グラウンドには選手の小学生が続々と集まり、練習をしている。辰真はカメラを取り出して練習風景を何枚か撮る。人手削減のため、辰真はカメラマンも兼ねているのだ。

（たしか神代君って言ったな。ああ、あの子だ）

丁度、その少年がノックを受けているところだった。強烈なゴロを華麗にさばいて送球する。

（名前は才輝、か。なかなかハンサムな子だな。野球も上手い）

辰真はその少年を重点的に撮る。

（一枚だけアップの写真を撮っておいて、カナにあげたら喜ぶかな……）

そう思っている間に練習が終わり、選手が整列を始めた。

（さ、仕事しなきゃ）

辰真は一塁側のフェンスの外に陣取り、カメラとメモ帳を構えた。

第4章・再び、寒

試合は進み、9回ウラ2-1で負けている。

「あ、あれは……カナ!？」

辰真から少し離れたところで固まっている女子の中に、香奈が遅れて入っていった。

(神代君を見に来たのかな……?)

まさしく、その神代がバッターだった。

「がんばってー!」

女子たちがいつせいに黄色い声援を送る。

(ははは……大人気だなあ)

などと思っていると、辰真のすぐ隣に座っている男が声を張り上げる。

「しっかりやれよー! 才輝イ!」

(さいき、って言うのか。彼は)

「女の子が見てる前で恥かくなよー! つーか羨ましいぞー、コノヤローっ!」

辰真も自分のことのように喜んで声をあげる。が、その声はすぐに落胆に変わるのであった。

その後、会社のオフィスにて。

「はーっ！はーっ！はーっ！」

またもや木場の落雷だ。

「お前はなんで肝心のところでしくじるんだ！」

「す、すいません……」

やってしまった。辰真はやってしまったのだ。

「逆転の決まった瞬間を……なぜ？ なーんーで！？ 撮り忘れる
ちゃうんだ!？」

「あまりに熱中しすぎまして、つい……」

「それでもジャーナリストか！ お前の役目は冷静に事実を捉え、
明確に伝えることだろうが！ お前が熱中してどうする!？」

「申し訳ございません……」

その後、長々と続く木場の説教からようやく逃れた辰真は、一応
記事のまとめ作業に移る。

「……先輩、大変でしたね」

隣の犬飼がコツソリ話しかけてくる。

「しょうがないよ。これは僕の責任なんだから」

「でも、熱中しないで試合を見てもその感動が人に伝わりますかね
……」

「え？」

「ただの記録だけなら誰でもできますよ。生で見た感動をいかに伝えられるかが腕の見せ所じゃないですか。新聞じゃないんですから」

「そう、だね……スゴイことを言うね」

「や、やだ。そんな大したことじゃ……」

照れる犬飼の隣で、辰真は思った。

(伝える、かあ。僕は本当に人に、なにかを伝えられるのかな……
？ 娘ともロクに話ができていないのに……)

「あっ！」

突然、辰真は大声を出し、木場にジロリと睨まれる。

「どうしました？ 先輩」

小声で尋ねて来る。

「思い出した……次の祝日のこと」

「え！？ な、なんだったんですか？」

犬飼は身を乗り出して辰真を見るが、辰真はうつろな目で宙を見つめていた。

（約束を思い出せないのは社会人として失格。妻と上手く話せないのは夫として失格。そして……）

「誕生日だ。娘の」

「カナちゃんの!？」

（娘の誕生日を忘れるのは、父親として失格……）

「なんで忘れちゃうんだ!？ 僕は!」

「ちよっ、ちよっと先輩、声大きいです」

その忠告も空しく、再び落雷。

「仕事中にうるさいぞ初穂オ！ つーか思いっきり怒鳴ってもイマイチ迫力がつかない名前してんじゃねーぞ初穂!」

「す、すいません」

……木場よ、それは辰真に言ってもどうしようもないぞ。

第5章・快進

大きなミスをやらかしてしまった手前、「それじゃあお先に」とは言いにくい。その日も辰真は残業をするハメになった。

「フウ……どうしよう……写真は今更どうしようもないけど……」

「来週のことを思い出せたからいいじゃないですか」

「あれ、犬飼君。先に帰ったんじゃないの？」

「生意気にも『相談に乗ってあげようかな』なんて思いまして」

「ハハハ……ありがとう」

犬飼が差し入れしてくれた缶コーヒーを飲み、もう一度ため息をついた。

「先輩、ため息すると幸せが逃げますよ？」

「ああ、昔からよく言われるね、それ」

「クヨクヨするのは置いといて。カナちゃんの誕生日、なにかプレゼントを考えましたか？」

「うん。うちでは娘の誕生日には必ずどこかに出掛けることにしようって約束してるんだ。……ってこれを最初に言い出したのは僕なのに、なんで忘れるのかなあ……ハア」

「ほら、またため息」

「おっと、しまった」

わずかに笑みがこぼれる。

「それで、どこに行くか決めたんですか？」

「いやあ……まったく」

「混みますよ。この時期の祝日は」

「うん……そうだよねえ。今からじゃ予約も取れないだろうし」

辰真はため息をつこうとして、グツと飲み込んだ。

「よし！」

犬飼が突然大声を出す。

「先輩、私が残業代わりますから、今からでもネットでどこか探してください！」

「ええっ！？ 悪いよ、そんな」

「いえ、乗りかかった船は最後まで行かせていただきます。この手書きの原稿を打ち込むだけでいいんですよ？」

「う、うん……」

犬飼はすでに仕事の目になっている。

「さ、早く席かわってください。どいてどいて！」

「は、は、はい！」

自分の席を追い出されて隣の犬飼の席に着き、パソコンの電源を入れた。

旧式のパソコンが低い音をたててゆっくりと起動し始める。忙しいときにはこの間が苛立たいが、今の辰真には心を落ち着かせる息継ぎになった。

ふと、隣を見ると犬飼は猛烈な勢いでキーボードを叩いている。

（もしもあのパソコンに自我があったら、急にペースが速くなってビックリしてるだろうな……）

などと思っていると、ようやくパソコンが起動した。しばらくの間オフィス内にパソコンを扱う音だけが響く。

やがて、犬飼が大きく伸びをする。

「うっくん……終わりましたぁ……」

「あ、ご苦労様。ありがとう」

「どこかいいたところ見つかりましたか？」

「とりあえず、S市の動物園にしようかなぁ……と」

「うん……あそこけっこう古いですケド。まあ見つかったならいいですね」

「うん。ありがとう」

辰真はぬるくなった缶コーヒーをすすする。

「……フフ」

「な、なに？」

小さく笑う犬飼に、辰真が尋ねる。

「いえ、別に」

そう行つて犬飼は帰り支度をする。辰真はふと気になって、声をかけた。

「ねえ、手伝ってもらつてこんなことを言つのもなんだけど……」

「はい？」

「犬飼君は……その、ずいぶん親切にしてくれるなあ、と思つて。相談に乗ってもらつたりして……」

「……」

犬飼はなにもいわない。沈黙がオフィスを支配した。

(あ、アレ!? 僕、なにかマズイこといったのかな……?)

ドキッとして汗が噴き出す。汗を拭こうとポケットからハンカチを取り出すと、うっかり床にを落としてしまった。

「おっと……」

慌てて屈む辰真よりも早く、犬飼がハンカチを拾う。

「ゴメン。ありがとう。」

しかし、犬飼はハンカチをじっと見つめたまま動かない。

「ハ、ハハハ……それ、何日も洗濯に出し忘れちゃってて、くしゃくしゃになっちゃってるんだよね……」

「そっくり……」

「え?」

犬飼が微笑みながらゆっくりと顔をあげ、辰真にハンカチを渡す。

「そっくりなんです。先輩」

「だ、誰に……?」

「お父さんに。私が幼いころに他界した……」

微笑んでいるつもりで犬飼の目に、うっすらと光るものがあった。

第6章・高気

「お父さんに似てる……？僕が？」

「はい……」

ひとまず、二人ともさつきまで作業していた椅子に座る。

「そっくりなんです。仕草とか、雰囲気とか。とても。」

「……」

「暖かいコーヒーが好きなくせに猫舌で、いつもぬるくなってからすすることとか」

「あ、僕もいつもそうだ」

辰真は空になったコーヒーの缶を見る。

「ハンカチもいつもお洗濯に出すのを忘れちゃって、くしゃくしゃになったのを持ち歩いているんです」

「そうなんだ……」

「けど、私が小学校の3年生の時に病気で……それからは親戚の家に預けられていたんです。」

「お母さんは？」

何気なく尋ねると、犬飼は急に顔を伏せた。

「お母さんは、その……私が小学校にあがる時に離婚して……」

「えっ……ゴ、ゴメン。変なこと聞いて」

「いえ、いつそのこと、全部聞いてもらえますか？」

顔を伏せたまま、犬飼の話が始まる。

「私が生まれたのは本州です。両親が離婚した理由はわかりませんが、私が6歳、弟が3歳のときに離婚して、私は父と一緒に本州に残ったんです」

「……弟さんは、お母さんと？」

「ええ。弟はまだ3歳でしたから、母親と一緒にのほうがいいと思って。それで母の実家である魅月町に引越したんです」

「じゃあ、弟さんは今もこの町に？」

「います。詳しい住所は知りませんが」

「……」

「それで、私は本州で父と二人暮らしを始めました。父は家庭のことが苦手な人でしたから、自然に私が覚えるようになったんです」

犬飼は小さく笑う。子供のように、屈託のない笑顔だ。

「男手一つで育てているものですから、休日にご遊んでくれることもなくて。それでも一生懸命な父の姿は、とても誇らしいものでした」
「カッコイイお父さんだったんだね」

「フフ……私にとっては、ですけどね。はたから見たらどうでしょう」
「う」

少し遠い目になって、話を続ける。

「……でも、もともとあまり丈夫な人じゃないのに、強がる性質たちでよく風邪をこじらせて、そのたびに『自分が働かないといけないから』と言って無理に仕事に行こうとするんです」

辰真は黙って聞いている。……いよいよ本題のようだ。

「ある日、40度近い熱があるのに出張にでかけたんです。『大丈夫だ。お土産買ってきてあげるから』と言って玄関を出て行って……それっきり、でした」

「……」

「今度は親戚の家に預けられました。その人はとても親切にしてくださいましたんですけど、私は悲しみを拭いきれなくて……それでふと思いついて、大学はこの魅月町を選んだんです。母の故郷がどんなところか、気になって」

「お母さんに会ったの?」

「……いいえ。いざ、会おうと思ったら、ついしり込みしてしまっ

たんです。私がこの町にいることすら話していないんですよ。大学の寮に入って、とにかく勉強に打ち込んで……」

「弟さんとも会っていないんだね？」

少し間をおいて、細い声で答える。

「会っていない……ハズ、です。最後に会ったのが3歳のときでしたから、今どんな顔なのかわかりませんし。もしかしたら、知らない間にどこかで会っているのかもしれないけど」

「そう、かもね」

「大学を出て、最初は中堅の会社に入ったんですけど、なんだか馴染めなくて。それで思い切ってこの会社に転職したんです」

「……」

「そこでビックリしたんです！先輩に会って、父にそっくりで……！私、すっかりここが気に入っちゃいました」

「それで、僕とよく話してくれるんだ」

「はい。……だ・か・ら・先輩？」

「は、はい……？」

「しっかりしてくださいよ？カナちゃんのこと、大事にしてくださいね」

犬飼はにっこりと笑ってバッグを取り、勢いよく席を立つ。

「それじゃ、私は失礼します。明後日、がんばって！」

そのまま、犬飼はオフィスを出て行った。

「……ああ言われたら、がんばらなくっちゃ。うん。頑張ろう」

一人残された辰真は、決意を新たにした。

第7章・幸先

そして、いよいよ香奈の誕生日を迎えた。

一家揃っての外出は、家族とコミュニケーションをとり、夫として、父親として威厳を見せることができるチャンスだが……

「……しっかりしてよ、あなた」

「ゴメン……」

おやおや、まだ家を出てすらいなのに、TVのニュースを見ながら妻にしかられている。一体、なにがあったのだろうか？

「まさかいきなり潰れるなんて思わなくて」

「あんな今にも潰れそうな古い動物園なんか選ばないで」

……と、いうことらしい。今朝、その動物園の閉鎖が突然に決まっただけらしい。

（せっかく犬飼君が手伝ってくれて調べたのに……なんでよりによってこのタイミングで潰れちゃうんだろう……）

早くもつまずいてしまった。しかし、今日の辰真はいつもと違う。この程度でへこたれはしない。

「こんなこともあるのかと、もう一箇所候補地があるんだ」

と、元気付いて出発した方がいいが……

「……いつもの公園じゃない」

「……ここ、通学路の近く……」

「ほ、ほら！ カナももう6年生なんだし、遠くに行くばっかりじゃなくて、もう一度近場を見つめなおすってのもいいだろう、って、その、ハ……ハハハ」

公園は割と広く、以前述べたように隣にグラウンドがあり、その反対側の隣には深い堀がある。日当たりのいい自然の豊なところが、わざわざ家族連れで来るようなところだとはお世辞にもいえない。

「いやー、天気がいいなあ」

「で、公園まで来たけどこれからなにをするの？」

「え、えーと……その、あ！ 向こうでなにかの練習やってるぞ！

あ、あああそれは、野球、かなあ、うん、あれはカナと同じ小学校だな。ハハハ」

「えー!?」

辰真は出来るだけさりげなく（白々しく）隣のグラウンドに移動する。

まさしく、野球クラブが練習に励んでいるところだった。

(神代君は……いた！ これで少しは機嫌が……)

「お父さん、ちょっと練習見に行っていていい？」

(よし！)

「お父さん？」

「あ、ああ。いいよ」

お〜い……いいのか？ それで……。まあ、なにもないよりはマシだろうか。

「いくぞー！ 才輝！ オレの魔球打てるかあ！」

「そーゆーセリフは……まともにストライクゾーンに投げられるようになってから言え！」

バシン！

「ボール、フォア！」

「あーっちくしょー！」

香奈はその様子をじっと見ている。

「ちょっと、あなた……」

妻が辰真を公園に連れて戻る。

「これは、家族で出掛ける必要あるの？」

「えー……と、それは、その……ゴメン」

「今謝られてもどうしようもないわよ」

「……」

気まずい空気だ。辰真は無理に話題を変えようとする。

「あ、そうだ！ カナが好きだって言ってた神代君の写真、あげようか……？」

「……あ・の・ねえ、あなた」

ここで、妻は大きくため息をつく。

「自分の色恋沙汰に父親が絡んでくるのって、年頃の女の子にとっては最もいやなことなのよ。気が利かないわね」

「！」

……効いた。これは効いたぞ。かろうじて明るく振舞っていた（振舞おうとしていた）辰真も、これには完全に参った。

「そ、そうか……そうだよ、ね」

がっくりと頭を落とす。それを見た妻が一応フォローを入れる。

「今のところ、カナが楽しんでいるのが救いね」

その香奈は、いまだに野球の練習風景に見入っていた。正確に言う
と、練習に打ち込む神代才輝に、だが。

「次、孝太郎はいりませう！」

先ほどピッチャーをしていた生徒がバッターボックスに入る。

「見てろよ才輝い！ バッティングのダイゴミはやっぱりホームラ
ンだ！」

そう言って力強くバットを振る。

マウンド上から放たれた白球が吸い込まれるようにバットに当た
る。カキーン、と小気味良い音がして、ボールは真後ろに高く飛ん
だ。

「あー！ ミスった」

「おい、相当飛んだぞ、あれ」

そして、この大ファールが波乱を呼ぶのであった……

第8章・乱気流

「あ……」

話をしていた辰真と妻の頭上を、ボールが飛び越えて行く。

ボコン、と鈍い音がしてボールは自動販売機の上でバウンドし、再び高く舞い上がった。

「あっあっ、落ちる！」

ボールは見事に公園を突っ切り、反対側の堀に落ちた。

堀は結構深く、大人でも足がつくかつかないかだった。

「すいませーん！ ボール、飛んで来ませんでしたか!？」

ユニフォーム姿の小学生たちが数人走ってくる。その後ろには香奈の姿もあった。

「ボールなら、その堀に落ちちゃったけど……」

辰真が言うや否や、彼らは堀の縁に走って行った。

「あー！ 水に浸かってる！」

「こつたるー、お前が打ったんだから自分で取りに行けよお」

「お、俺が……!?! 俺、あんまり泳げないんだけど……」

「こうたるー、と呼ばれた男子がイヤイヤと手を振る。

「大丈夫だって。ちょっと拾って戻るだけだろーがよー」

「でも……」

「やめた方がいい。……ここは結構深いぞ」

助け船を出したのは、才輝だった。

「そ、そうだよな！ 才輝。ここの堀には入ってはいけません、て言われてるし……」

「なんだよー、ビビリ」

一人がけなすように言った。

「なに!?!」

「怖いんだろ」

「ち、ちげーよ！ わかったよ、行けばいいんだろ！」

「孝太郎……」

止めようとする声も聞かず、孝太郎は堀に飛び込んだ。

「へへ、余裕、余裕。確かに少し深くなってるけど……」

ザブザブと水をかきわけてボールを拾う。

「おい！ ボール投げるから受け取ってくれー！」

と、叫んでクルツと振り向いた瞬間

「うわっ!?!」

「あ！ こつたるー！」

野球の練習によって疲れた体で急に体の向きを変えたのがいけなかったらしく、孝太郎は足をつって水の中に沈んだ。

「孝太郎！ 大丈夫か!?!」

才輝の緊迫した声で、辰真は急いで堀を覗き込む。

（溺れている!）

「がっつ……ぶはっ……あ」

「落ち着け！ 慌てるなー！」

水難事故というものは、冷静になればどうにか対処できることが多い。しかし、人間、特に泳ぎが不得意の者にとって、大量の水は恐怖の対象である。

水の中で自由に身動きが出来ない状況は激しいパニックを引き起こす。現在の孝太郎はそうなっていた。

「た、助けにいかない！」

一人が言って飛び込もうとするが、才輝はそれを止めた。

「溺れているヤツにうかつに近付くと、自分まで巻き込まれるぞ。

……なにか、ロープの代わりになるもので引つ張った方が……」

「そんなの、どこにあるんだよー!？」

「それは……」

才輝が返答に困っていると、突然香奈が叫んだ。

「お父さん!？」

いつの間にか辰真は上着を脱ぎ、堀の中に飛び込んでいた。

「お、お父さん……」

「あなた、やめて!カナツチなのに無理しないで!」

香奈と妻が同時に叫ぶ。しかし、辰真は自分がカナツチだからこそ飛び込んだのだ。

(水に溺れるのって、とても……とてもつらいことなんだ!スゴク怖くて、一分一秒でも早く助けてほしいんだ!だから、助けなくちゃ……)

水の怖さを知っている辰真だからこそ、誰よりも早く行動を起こすことができた。

「あの人、初穂のお父さん？」

一人が尋ねるが、それは香奈の耳に届かなかった。

「泳げないくせに……戻ってよ！ お父さん！」

辰真は娘の声をかすかに聞き取りながら、水に入った。

（落ち着け。元々人間の体は水に浮くようになっていているんだから……！）

少しずつ、少しずつ、孝太郎へと近づいて行く。全く泳げなかった辰真にとっては、奇蹟に近いことだった。

「いいぞ！ もう少し！」

応援の声が入る。そして、ついに孝太郎のもとへ辿り着いた。

「もう大丈夫だ……う、うわ！？」

「あっ……ぶふあ、あば……」

パニックに陥っていた孝太郎は辰真にしがみつき、そのせいでバランスが崩れた。

「うあ！ わ……ガブっ……」

「お父さん！」

「孝太郎！」

二人はもつれあいながら沈んでいく。想定していた最悪の結果だ。
(や、やっぱりダメだった……僕が都合よくいきなり泳げるようになるなんて……うぶっ)

自分自身もパニックになりかけていた辰真は、ふと、水の中であるものを見つけた。

それは、孝太郎の手にしっかりと握りしめられた野球ボールだった。

(こんなに大変な状態なのに、ボールだけは離さないんだ……大事、なんだな。とても)

そのことに気付いたとき、脳裏に犬飼の顔が浮かんだ。

しっかりとしてくださいよ？ カナちゃんのこと、大事にしてくださいね。

そんな声が聞こえたような気がした。そして、辰真は水を飲まなようにしっかりと口を閉じて片腕を伸ばし、もがく孝太郎の体をつかまえた。

……それから、なにがどうなったのか辰真自身は覚えていない。気が付いたとき、辰真と孝太郎はコンクリートの足場の上に倒れていた。

「やった！ スゴイぞ！」

薄い意識の中で、辰真は大きな歓声を聞いていた……

エピソード・季節はずれの春一番

「はー！つー！ほー！」

おやおや、朝っぱらからまたもや木場が辰真に大声を出している。

(あ、あれ？ 僕、今度は何をやらかしたっけ？ ……わからない。けど、とりあえず謝っておこう)

「ス、スミマセンでした……」

辰真は深々と頭を下げる。しかし……

「はあ？ なーにやってるんだ、お前」

「え？ (謝り方が足りないのかな？ それじゃあ) 本当に、申し訳ありませんでした！」

もう一度、さっきよりもさらに深く頭を下げる。

「……！」

(……?)

ようやく、木場がすれ違いに気付いた。

「いやいや、そうじゃなくてだな。初穂、お前もやればできるじゃないか」

「え？」

辰真は驚いて顔をあげる。

「まあ、記者としてはやや微妙だが……人間として、よくやった」

「はあ……」

未だにボンヤリしている辰真に、木場がなにかの原稿と写真を放り投げる。

「ついでに、仕事の方もそのくらい頑張ってくれよ」

そう言っつて木場は自分のデスクに戻って行った。

「なんのことだろう……」

辰真は席について渡された原稿と写真に目を通す。

「あ！これは……」

「上手く撮れているでしょう？先輩」

「犬飼君……」

オフィスに入ってきた犬飼はイタズラっぽく笑って辰真の隣に座る。

「正直に言っつて、少し心配だったので。コッソリ後をつけさせていただきました」

「み、見てたんだ。コレ」

「フフ。おかげでおいしいネタがとれました。ほら、コレ見てください。カナちゃんのすごく嬉しそうな顔」

新たに手渡された写真には、香奈の喜びが写っていた。

「……どうです？ 大したものでしょう」

「いや、その、カワイいなあ。やっぱりウチの子は」

「ってそっちですか！ 褒めるのは」

「あ、ハハハ。ゴメンゴメン。犬飼君もスゴイよ。ちゃんと仕事と両立できてるんだから」

「冷静に真実を伝えるのが仕事ですからね。……でも、見るだけつてのもツライですよ。人の危機に仕事してる場合かって葛藤が……」

そう言っつて犬飼はわざとらしく頭に手を置く。

「でも、先輩がなんとかしてくれらつて信じてましたから、安心して見守っていました。」

「そ、そっ？」

ハッキリ「信じている」と言われて照れている。

「じゃ、先輩。この原稿預けますよ」

「え？」

「前に行ったじゃないですか。自分の体験がないと人には感動が伝わりにくいって。だから、この続きは当事者に任せます」

犬飼は原稿を辰真に押し付け、そのままオフィスを出て行く。

「あ、おゝい、犬飼君……」

「私、朝一から取材予定があるので。それでは」

足早に歩き、犬飼は会社の建物から出る。

そして、辰真のいるオフィスを見上げて小さくつぶやいた。

「……がんばってね。おとーさん」

原稿を前に記憶を探る辰真の顔には、ほんの少しだけ力強さがあった。ふと、頭に浮かぶのは娘と妻の笑顔。

（今日は早く帰って、一緒に晩ごはん食べよう）

働く男の心に、季節はずれの春一番が吹き渡った。

不器用に生まれ持った男は、なにかと気苦労が多いものだ。

さあて、辰真よ。今回は上手くいったが、娘はそろそろ反抗期を迎える年齢だ。まだまだこれからが正念場だぞ。まったく、年頃の娘というものは……

……と、子育て談義は置いて、いかがだったかな？今回の話は。

もちろん、その後の彼らについてもっとじっくり話すことはできる。しかし、この町にはまだまだ、「語られるべき物語」が存在するのだ。

今度この町を訪れることがあれば、その中の一つを紹介しよう。

……私の名前は魅月町。また、会う日まで。ごきげんよう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3039d/>

魅月町・騎行の風

2008年8月29日17時54分発行